

句は名所圖會に見えたり

しら梅や北野の茶やにすまひどり

かた枝に脈やかよひてうめのはな

真野里

尻池村

をいふと古書に見えたり今も東尻池村に字を真野といへ

る所あり當村の古名なるべし或は大和國にありと云ふ説あれども万葉集
黒人のよめる歌に

いさや子ら大和へ早く白菅の真野の榛原手折てゆかんとあり契仲は

大和へ早く云々ゆかんとあるによりても大和ならざるとは明かなりとい

へり黒人は奈良の朝の人にて任によりて津國に往來せし時此歌をよみし

と聞ゆれば攝津國なる事疑なきに似たり榛原は下の條にあり

君かため真野の里人打ひれてとる若苗や万代の數 澄 信

真野浦

真野里の海岸をいふなるべし古書東尻池村を指せり但夫木集に

は近江國とあれども入江をよみ結びし歌は皆攝津國と爲せり

燕村

支考

吾妹子か袖を頼みて真野浦に小菅の笠をき捨來に鳧

夜半に吹濱風寒み真野浦の入江の千鳥いまも鳴なる

冬かれの尾はなをしなみ降雪に入江も氷る真野浦風

わし鴨の浮寐よいかに波枕たのむ入江の真野浦かせ

真野海

同く海邊をいふなるべし古書の指す所亦同し

真野池

西尻池村荻藻川の東岸にあり池の字を中井といふ山陽鐵道を挾

みたる池是なり古書には東尻池村の西にありと見えたり昔柿本人丸主

の明石に下りし時馬の足を洗ひし所にしてそのかみは區域廣大なりしと

かや攝津志に四百三十畝ありと記したれば享保年間までは猶それほどの

面積ありしなるべきも今は然らず

真野の池の小菅を笠に縫すして人の遠名を立可物か 人 磨

今朝見れば浮寝のをしのあくかれて氷をひたる真野池水 實 清

真野の池島つたひ行鴈金や春は芦まの橋と見ゆらん 内後 大九 臣條

人 磨

法真 師照

宗 行

雅 經

人 磨

實 清

内後 大九 臣條

蛙なく眞野の池邊を見わたせば岸の山吹花咲にけり

仲 實

夕されは眞野の池水氷してよかれから成あちの村鳥

三條入道

眞野入江 西尻池村荻藻川の流末を云ふ歎今も此邊沼澤の形をとどめす
へての地勢據あるものゝ如し

曇なき影もかはらず昔見し眞野の入江の秋の夜の月

爲 致

假寝する眞野の入江の秋の夜に片敷袖は尾花也けり

親 長

ことわりや眞野の入江に鳴千鳥浦風寒き有明のそら

俊 成

眞野繼橋 同村地内駒ヶ林の往還に當れる荻藻川の橋をいふ今駒榮橋と

稱せり或は東尻池村民家の間にあるさうやかなる石橋なりともいへり年

代の久しき土地の變遷はさることながら繼橋といへる名にもつきぐし

からずこは荻藻川の橋を指す方よろしからん攝津志には荻藻橋東尻池村

にあり或は云ふ眞野の繼橋是なりとあり東尻池にありといへば前の石橋

に似たり荻藻の名によりて考れば荻藻川の橋に近し如何にや

涙見ても物思ふ身と成に鼻眞の繼橋と絶のみして 相 撰

借も猶通はて社は頼まれめ絶しと云し眞野のつき橋 爲 子

芦の葉にまがふ螢のはのくど獨を渡る眞野の繼橋 長 明

逢事をと絶かちにも成行はふみたに通へ眞野の繼橋 肥 後

淀繼橋 眞野の繼橋の一名なりとも又駒ヶ林村にありともいへり淀繼橋

をよみし古歌には眞野浦を結ひしもの多し眞野繼橋の一名とする説可な

らん歎古書には二橋と爲せしものあり又古は駒ヶ林の浦邊までも一つら

に眞野と稱せしも知るべからずと記せしものもあり諸説區々にしてさだ

かならず今はたゞ聞まゝにしるしとゞむ但し夫木集は山城國と爲したれ

ども和歌大名寄は攝津國を指せり

眞野の浦の淀の繼橋心ゆも思ふや妹か夢にし見ゆる 吹黄刀 自

眞野の浦の淀の繼橋つきもせずつらしと人を聞渡哉 經 朝

しるらめや淀の繼橋世と共につれなき人を戀渡とは 長 宣 母 卿

絶ね只みるめも知らぬ真野の浦に渡すかひ無淀橋 陸 祐
真野榛原 真野里の近傍にありしならん今は指す方詳ならず榛は皮を取
りて衣の染料となすものなりとぞ万葉集に

白菅の真野の榛原心にも思はぬ君かこるもにぞする」とあり
荊藻川 水源を鵜越の山脈に發し長田村より西國街道を横斷し西尻池村
に至りて海に入る古書に荊藻橋は荊藻川に架す川によりて橋の名とする

よし記せりこは今の駒榮橋ならん昔は幅も廣く水も深かりしと聞えた
れども今は涸渴にて川幅はわつかに三間許となれり攝陽群談には壽永の
戦に平重衡卿の虜せられしは此川の邊なりと記すれども東鑑には明石に
て虜せらるゝと見え源平盛衰記にも蓮の池をも打過ぎ小馬林を左に見な
し板宿須磨にぞかゝり賜ふと記し平家物語には湊川荊藻川をも打渡蓮の
池を右手に見駒ヶ林を左手に成し板宿須磨を打過ぎて西をさして落賜ふ
と記したり事實如何にや猶附録重衡松の條參考すべし

武藏守 平知章 卿墓

東尻池村西國街道筋荊藻川の東にあり昔は西代

村の山手にありしを享保年間並河某此處に移して石表を建立せり其意行
人をして孝子の美名を知らしめんとするにありとぞ近き頃又之を改築せ
しものあり碑の高六尺許其表に平知章之墓と彫付たり前知縣内海主の筆
なり舊碑は新碑の後にあり表に六字名號を刻せり高三四尺許ありしとい
へど今は半土中に埋れぬづかに一二尺を餘せり抑々知章卿は新中納言平
知盛卿の嫡子にして大夫敦盛卿と齡を同くせり壽永三年二月七日生田森
の戦敗れて父子及侍監物太郎頼方主と主従三騎汀の方に落行所に源氏の
武士追駈來りて知盛卿に組んとするを卿は父を討せじと押隔たり引組み
て其首を搔きおのれも亦敵の爲めに討たる頼方主又卿を討らし者を斬り
踏としまりて討死す知盛卿因りて逃延ることを得たり史に

七十六百 詩中に卿を賛して曰ふ

子死而救父々棄子而走云々」記せしは是なり頼山陽翁の一谷懷古の

獨有^ニ武州能捐^レ驅、婦人群中見^ニ丈夫^一と確論といふべし近傍^ニ大手村の勝福寺に卿の甲冑を藏すと聞るたれども未だその由來を知らず
双墳相對万年愁、右是河州左武州、家國恩深兩未^レ報、經^ニ過此路^一二十餘秋、

子代^レ親云死、親捐^レ子而逃、兩双能處^レ戰、平族爲^レ之豪
賴 山 陽

監物太郎賴方主墓

知章卿の墓

失 名 氏

とする道路の傍にあり碑の高三尺許南表にして知章卿の墓と相對せりこれも亦並河某の忠臣の名を世に知らしめんか爲め建立せしものなりとぞ
賴方主戰死のこと前に見えたり

越前三位平通盛卿塚

東尻池村字西野人家

畑の中にある塚ならんか^ニ所圖會及巡覽圖繪に知章卿の墓の東北に松四五本印にありとあるに符合せり攝陽群談にも東尻池村にありと記せり今

は松の印も失せて一面の岩石あるのみ攝津志には佐比江堤の東北にありと記したれども然る跡も認めず兵庫名所記には兵庫より十町許西街道の南池のはたにありと記せり前の書と南北の相違あるなり其他古書の示す所區々にしてさだかならず又同村夫婦池の側にありと記せしものあるは

池中にある塚を指すならんこは木村源吾主の塚なるに似たり猶他日を待て再攷すべし但し卿の討れたるは湊川堤なること東鑑盛衰記平家物語等皆一様なり其塚の此處にあるは疑なきにあらず名所圖會は昔の湊川堤なるべしと記したれども湊川の流域は改更せしは卿戰死の前にあり此に湊川堤といふは昔の湊川堤にあらざること明かなり同書小宰相局塔の由來には通盛卿は一の谷にて死せりとも記せり未だ孰か事實なるやを知らず
木村源吾重章主塚 東尻池村通盛卿の塚の側なる池の中にありと古書に見えたり同書に通盛卿の塚と指す所は前の如し其近傍の池は夫婦池とつば池との二個所あるのみ而してつば池には塚なし或書には小平六池の中

にありと記せり小平六と稱する池はやがて夫婦池の事なりたしかに此塚なるべし近き頃までは塚上に梅ありしも今は只の土塊となり其上に石標一基あり但し重章主は通盛卿と闘ひ相討して死せりと云ふ其戦死の事平家物語の外に見るす東鑑には源三俊綱盛衰記には源三成綱とあり今平家物語の記する所に従ふ

長田里 長田村をいふ古の名所なり日本紀には長田國と書せり古は廣き所を稱して國といへり難波國吉野國廣田國活田長狹國など其類多し

雨露も恵みあまねき時にあひて長田の里に早苗取也 兼 仲 増田山 長田村の入口にある一小丘なり其上に高樓あり兵庫の人増田某

の別荘なりしより此名あり建築敷奇を盡し庭内には頼翁の石ふみあり南一の方田圃をへだてて海を望む風景頗るよし今は何人の所有なるを知らず近傍の家は酒樓となれり

長田神社 同村にあり祭神は 事代主の大神なり日本紀に

事代主神託而誨ニ 神功皇后曰、祀ニ吾子御心長田國、則以ニ葉山媛之弟

長媛一令レ祭レ之とあり創立の年代は生田神社に同じ後貞觀元年正月從四位下を授け奉りしこと三代實祿に見るたり抑當社は延喜式内の神祠にして歴世の御朱印地なりしを維新の後郷社に列せられ明治七年縣社に同十八年官幣小社に二十九年官幣中社に進められたり境内三千餘坪本社以下建物十三棟末社七坐あり社前の細流を苅藻川といひ橋を入雲と號す橋の事は下の條に詳らかなり馬場の長殆ど三町其左右には老松森然として繁茂し西國街道に面して一基の華表を建たり扁額の字は小野道風公の筆なりと古書に見ゆれと今の華表には扁額なし神庫にや藏するならん拜殿の西に 村上天皇御寄付の石燈籠一基あり高一丈許其形尋常の燈籠に異なれりこは應和三年七月十五日雨を當社に祈り賜ひし時寄付せられしものなりとぞ其他神庫には保元、建久、承久、延慶年間の國宣及び建武天正中の施入文等を藏するよし古記に見えたり境内には子日庵宗匠の碑句

あり

稻の香や万事長田の神の秋」と刻せり又長龍石、力石、さし石などいへる石あり殊にめづらかなるは群鶏にして开は眼病を憂ふるもの神に祈りて放つ所なりとぞ人皆神徳を畏かみて犯すものなく卯は樹蔭真砂路の間に遺り膠化して漸く増殖すといふ三々五々群を爲して階々餌をあさり人の來るを見るも驚く色なく慕ひ來りて拂米を上るを待つ其さま手飼の鶏に異なることなし

八雲橋

長田神社の馬場ばばにあり昔は木橋もくけうなりしを近き頃鐵桁てつがうに改め板敷いた唐金からかねを鏤おりのめし等頗る莊麗さうらいなり或は鐵橋てつに作りしは神祠しんしにつきくしからず抔も譏まじるものあれども其下こそ鐵てつをも用たれ上部は普通ふつうの木橋もくけうに異ならず何なにのつきくしからざる所あらんや橋下けうかに一基の碑あり八雲橋改造之記かいてきと刻せり其文は姫路ひめぢの人下田某氏しもた かのうの撰する所なり

二十七八年戦死者紀念碑

八雲橋の畔たもとにあり土地有志者ちとじの建る所にして

建立の趣旨は碑の名に同じ銘は陸軍武官某氏なり

越中前司平盛俊王塚

長田村明泉寺の下荊藻川の上流に沿ひたる畑の中なかつちんせんじたひらのもりにあり塚かたはら上古松一本生立たりと記せり此處は名倉池の下に當れり今は松なく荊棘けいげき生茂れり盛俊主は平家の一族にして六七十人を兼たる大方なり嘗て越中守たり後侍大將せからひとなる因りて越中前司といふ壽永じゆへいの役山手の大將として明泉寺に陣せしに一谷おち陥りて味方總敗軍そうはいぐんとなり遂に猪俣小平六主いのまたの歎なげく所となり此處にて討死せしとぞ

名倉池

同村盛俊主の塚の上方東手にあり面積凡そ三四百畝もあるべし水深くして四時絶ゆる時なく細漣岸を打て物すこきこと限なし元は田園灌漑くわんがいの爲めに作りしものなるべきも一觀自然の深潭しんたに似たり山尾池さんび中に突出する所に松數本あり此邊景色最もよし嘗て神祠ありしと聞ゆれども今は跡なし土人は之を明神めいじんの祠といへり

明泉寺

同村字明泉寺にあり天照山と號す天平七年の創立に係り往古は

備藍宏壯にして壽永の役平盛俊主の陣所たり其後兵燹に罹り堂宇盡く焼
失し纔に其形を存せしも明治五年廢寺となり同十五年を以て再興せり宗
旨は臨濟宗南禪寺派にして本尊大日如來は行基菩薩の作なり祈る所靈應
多く參詣する者常に絶えず現時は本堂以上建物三棟境内地二百六十餘坪
あり

神撫山

明泉寺の西に當れる峻嶺なり長田神社より坂路十七八町もある
べし俗傳に云ふ 神功皇后三韓より歸朝し賜ひし時此處に至りて石坐あ
り巖頭を撫て賜へは忽ち高山となる故に神撫とは呼ぶなり又山中鷹の巢
多く鷹を養ふ者巢を設けて之を取る因りて鷹取の名ありと頂上は神戸市
と兵庫との境界の分るる所にして其邊に神祠あり鷹取神社といふ俗に鷹
取大明神と稱するは是なり四方景色に富み神戸以西攝播の海山は更なり
市街村落に至るまでのそみて見るざるものなし古書には延文年間月庵和
尙暫く此處に閑居せしに霧深く雪消えずして凌ぎ難く遂に山を下りて禪

昌寺を創造せりと記したれども今は左までの難所にはあらず神祠に祈り
景物を翫ぶ者四時登山して絶ゆる時なし

蓮池

神撫山の下池田村の西にあり面積四百五十畝行基菩薩の穿つ所に
して農家早魃の憂を除かん爲めに作りしものなりとぞ池中に蓮一莖を植
ゑて淨土八功德に准へしより蓮池の名あり一説には小松内府の臣蓮池權
頭家綱主の戦死せし所なるより此名ありとも云へり

駒林

村の名もやがて駒林といふ古き文には小馬の林とも書けり歌枕
大名寄康頼の歌に

古の小馬の林の松見ればうつしふる葉もかはらざりけり」とあるは是
なり村内の松原を呼ぶと聞えたれども今は人家ひらけて名残をとゞめず
或は隣村野田の松原を指すものあれども如何にや

源氏松

駒林村宇出在家の北田圃の岸にあり光源氏の須磨にさすらひし
時植られしものなりとぞ駒替松又二葉松茶筌松等の名あり古木は枯れて

植繼なり源氏の君は式部の刀自の虚言なるに斯る遺物のありともれもはへず况して源氏物語にも松を植し事を記せずは好事家の作り倣しよものにはあらざるか

薩摩守平忠度卿塚

同村字中町民家の間にあり土俗腕塚と呼ぶ播磨

國明石にあり孰れか是なるを知らず古書に一名を薩摩塚と云と記せしも今其名を唱ふるものなし塚は三間四方許なる堂の内にあり正面に一基の碑あり其表に忠度塚の三字を刻す左傍に五輪の塔あり古書に見ゆる所是なるべし堂の前にある井筒を手向の井と稱す供靈の用に備ふる爲め穿ちしものなりとぞ今も香花を手向る者四時絶ゆる時なく燈籠提灯の類をかけつらねて殆んど隙間なく中には大阪さては堺等のしるしあるものあり抑忠度卿は平清盛公の第六の弟にして武道に精しきことは云に及ばず又文章に老け和歌に巧みなり

さく波や志賀の都は荒にしを昔ながらの山さくら哉」の一首は載せて

千載集にあること偏く人の知る所なり壽永の役一の谷の大將たりしに味方惣敗軍となり岡部六彌太忠澄主の爲めに討れしと物の書に見えたり其時にも

行くれて木の下かげを宿とせば花や今宵の主なるらん」の一首を鑑の縫につけ居られしとぞ

さこね堂

同村堂の町にあり寛政年間創立せしものにして元は阿彌陀堂

なりしを今は段通の製造所と爲したり初め堂の成就するに當り村中の男女七日七夜の間參籠せしより此名あり俗にいとみたりかはしき所行あり杯云ものあれども开は堂の名によりて思付たる証言なるべし當時參籠せし者は垢離をとり食を断らしはどなれば斯る所行のあるべき筈なしと土人はいへり然もありなんかし

樂月寺

同村さこね堂の北にあり元は松月庵と稱し臨濟宗南禪寺派の寺

なりしを維新の後庵號を廢し同村海泉寺に合併せしも庵室は猶依然とし

て残り庭前一面に樂月生茂り春晚看花の客多く遂に花の名を以て寺に
おぼするに至れり

白波松

野田村の海濱にあり一名を盗人松ともいへり海中に臨みて白波

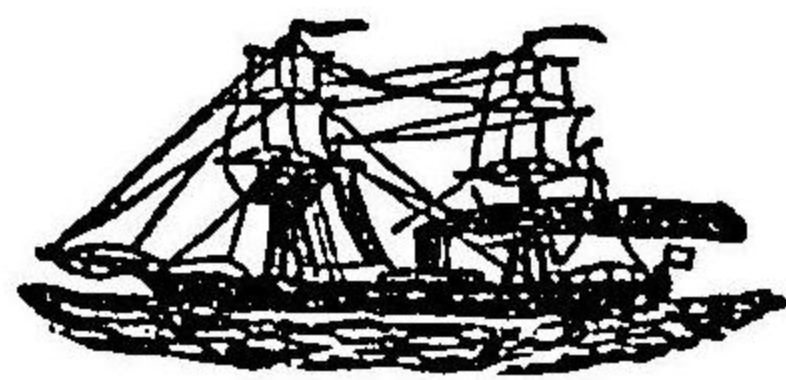
の立たぬ際なきより此名ありとぞ又盗人松の別名あるは白波の名あるが
故なるべし盗人を白波といへること後漢の張角が故事に始るとかや昔は
株の太一丈六尺枝葉南に流れて二十丈許ありしといへり斯れば此名ある
も道理なれども今指す所のものは然まで大なるものにもあらず且往還よ
り北手となりその南に一帶の松原あり所謂白波の立べきは是にあらずし
て彼にあり今は其名につきくしからざるに至れりとも又地勢變遷の致
す所なるべし

古碑

野田村の松原にあり地の人はいくすの墓と呼べども其由来を

知る者なし碑の高四尺許碑面文字ありし如く見ゆれど蝕滅して讀むべか
らず其邊には五輪の小塔なご散乱し又碑の色の古りたる一見して近世の
ものにあらざるを知るべし攝津志に村内に盗人塚と稱するものあるよし
を記せり此碑盗人松と相並べり或は是ならんか

神戸市名勝案内終



附 録

神戸より西の部

板宿村

神戸市に接し西國街道の北に沿ひたる一部落をいふ菅公筑紫下

向の時板の假屋をしつらひ一夜を其處に明し賜ひしより此名ありとぞ

飛松

板宿村の後に當れる山頭にあり古書には菅神飛松と記せり菅公愛

水の一にして公筑紫に下られける時

梅は飛櫻は枯るゝ世の中に何とて松のつれなかるらん」とありしに松

もまた此處に飛來りしと云傳へり

得能山

同村にある一帯の山嶽をいふ延元の役四國の得能氏官軍に應じ

來りて此處に陣せしより山の名にればせしとなり

禪昌寺

同村にあり神撫山と號す延文年間月庵宗光和尚の開く所にして

一 臨濟宗南禪寺派に屬し本尊は十一面觀音なり方丈を豐國亭と稱するは豐

公より伏見桃山の殿宇を賜はり此處に移せし故なりとぞ其建物は明治十二年火災に罹り烏有に歸せしも紙襖四本戸襖六本は猶殘れり其畫は狩野永徳の筆にして楓は四季色を變じ秋にむかへば紅葉すること活たる樹木に異らず烏は時に聲を發し飛揚せんとせしこと屢なるより眼睛を抜とりて其喧噪を止めたりと云傳へり寺門は左甚五郎の作にして扉を開閉する毎に美音を發すること笙篳篥の聲に同じ境内には丹楓多く秋老け時雨降る頃に及びては樹間錦を掛るが如し其下二基の碑あり

友まつと見ゑず紅葉に一人かな
本尊は釋迦か阿彌陀かもみち哉

はせを
瓢水

と刻せり又佛殿の前にある木屋は月庵和尚入唐の時携歸りしものなりとかや但し古木は已に枯れたれども餘孽生たちて今は一の大樹となれり

戸澤光盛主墓 禪昌寺境内にあり光盛主は羽後國新庄藩戸澤氏の祖先にして天正十九年朝鮮征伐の路すがら播州鹽屋にて病歿せしを此處に葬り

しと云ふ其傍に從臣何某の墓あり

大手村 板宿村の西に續きたる村落をいふ此處は一の谷城の東門を置たる所なるより大手とは稱すといへり攝津志一ノ谷より三ノ谷までの條に壽

永年間城墟東門址在「大手村」と記せしは是なるべし史に生田爲東門とあるは總構の二の城戸にて此處にありしは皇城の大手門ならん歟
證誠神社 大手村にあり昔は聖靈權現といへり祭神は五十猛命なり永正

十三年九月の創立にして明治六年八月村社に同十四年七月郷社に列せられたり大手、板宿、野田、東須磨等の産土神なりと古書に見えたり

勝福寺 同村にあり桂尾山と號す古義眞言宗本尊は觀世音菩薩なり當寺は一條天皇熊野權現の示現を得永延二年を以て建立し賜ひたる靈場なりそのかみは伽藍壯宏にして寛政年間までは坊舎五宇ありしも今は大に

其數を減せり

三 清友園 同村にある梅園なり主人を友國何某氏といふ當園は近年を以て

開きたる所にして樹木猶稚きも神趣は他の梅園に劣らず且昔より行平中納言卿の遺愛の梅と稱する老樹あり其種ををるして培養せしものなりといふ誰やらんの歌にも

植そめし心の花もかをるめり昔ゆかしき園の梅香」とあり

妙法寺

妙法寺村にあり眞如山と號す古義眞言宗にして本尊毘沙門天は

行基菩薩の作なり當寺は 推古天皇の勅願所にして承和六年定範上人の

重興に係り昔は僧坊三十七宇もあり高師直同師泰主の爲めに軍馬の破壊

する所となり再營の後は大に其數を減せしも寛政年間までは猶七宇を有

せしに今はわづかに本堂及境内佛堂各一棟となれり當寺を一に新鞍馬寺

と稱するは定範上人洛北鞍馬寺に參籠し其示現を得て重興の祖となりし

による 高倉院の御時福原遷都の御祈願ありし折にも新鞍馬寺の詔を下

し賜はりしとぞ

善福寺

車村にあり眞言宗なり本尊地藏菩薩は建武年中足利尊氏公兵庫

合戦の時公の侍仰厚かりしが爲め一法師と立あらはれ空中にて敵の箭を拾ひて公の勝利に歸せしめたるより矢拾地藏と稱せり元兵庫魚の御堂の本尊なりともいへり

鷲尾氏舊屋

東下村にあり義經公一谷攻の時鵜越の案内者たりし鷲尾三

郎義久主の舊屋なりとそ家に辨慶及龜井六郎主の太刀を傳ふと古記に見

ゑたり庭前には義經腰掛石と稱するものあり下田井畑村に同名の所ある

は其條にも見ゆる如く同氏の支族ならん

八幡神社

中村にあり長徳元年五月十六日の勸請にして保安四年六條判

官源爲義公の再營せし所なるにより一に六條八幡とも稱せり

若一王子宮

福地村にあり永仁五年の建立にして應永十五年の重修に係

れり

白瀧辨財天

原野村栗花落氏の邸内にあり同氏の祖先白瀧姫を祭る所な

りと古書に見ゑたり所傳に曰く白瀧姫は横執右大臣豐成公の息女にして

才色世に勝れたり粟花落氏の祖先山田郡司左衛門尉眞勝といへる人 淡路廢帝の御時朝廷に仕へ白瀧姫を戀慕して

水無月の稻葉の露もこがるゝに雲井を落ぬ白瀧の糸」云送りしに白瀧姫のかへしに

雲井からつひには落る白瀧を左のみな戀ぞ山田男よ」とあり 天皇叙開ありて姫を眞勝に賜ひたり其後三年を過ぎ一男兒を産みて身まかりけるを邸内に葬りて廟宇を建て又粟花井の奇特により詔を下して辨財天と崇られしと一説に眞勝主心のたけをなげき聞えけるかへしに 雲たにもかゝらぬ峰の白瀧を左のみな戀ぞ山田男よ」とあるを押かへして

水無月の稻葉の末のこがるゝに山田に落よ白瀧の水」と云やりければ 豊成公其淺からぬ志を感じ朝廷に奏して娘を嫁せしともいへり二首の歌れのく相似たれども前後の序は大に違へり但し歌からは後の方勝れり

前々眞勝主の露もこがるゝの句又白瀧の糸と縁なき詞にて結びたる所なと打かたふるゝ所あり殊に姫の雲井からといへる詞頗る下びて聞ゆ右のおといとも云はるゝ方の息女にして斯く賤しけなる口つきありともれもはゑすこは後の説可ならんか

明要寺 山田村にあり丹生山と號す本尊は十一面觀音古義眞言宗なり當

寺は 欽明天皇の御宇百濟國何某王の太子童男行者の開きし所なり

松風村雨墓 田井畑村にあり字を畑殿といふ畑殿とは二女の氏なり行平

中納言卿歸洛のゝち此處にて天命を終れりと二女の事下の條松風村雨

故蹟に詳なり

鏡池 同村にあり松風村雨の二女此池にて水鏡を見髪を梳りし所なり

どの所傳なり

鷺尾氏舊屋 同村にあり鷺尾三郎義久主の支族なりとぞ家に鏝空穗征矢

等を藏せり

八幡神社

同村にあり厄除八幡と稱す長享三年四月村老の男山八幡宮を勸請せし所にして社殿は其頃前田出雲守主の造營、元祿十五年蒔田權佐主の再營に係り維新の後は村社に列せられたり

須磨 里、浦、海、凡そ一所と知るべし攝津國西南の一隅にあるに因り隅浦と稱せしを 用明天皇の御宇村名二字以上に限ると捉せられしが爲其際より瓊瑤と改め後又須磨と書かへしとかやそのかみは船舶の泊する所なりしゆへ浦と呼びしも中古以後は海淺せ船を泊するに勝へず爲りしより浦を廢して村とは爲せしとなり近き頃西須磨、東須磨、濱須磨、須磨新田等に分れ又東西の兩須磨と爲りしも昔の須磨は今の西須磨のみに限れり此地は中納言行平卿の遺蹟多く又源氏物語に入り殊に地勢は南方海に面し北には峨々たる山嶽を負ひ四時の眺め一としてよるしからずといふ事なく古より明石と並べ稱せられぬけて觀月の名所たりされば紫式部の刀自の八月十五夜に石山寺に參籠して源氏物語を作りしも月の湖

水にうつる心の澄わたるまゝ物語の風情空にうかひ先須磨明石の兩巻を書といめけるよし河海抄の序に見えたり須磨の巻に

今宵は十五夜なりけりとおぼし出て云々」とある是なり近世藤井竹外翁の詩にも

行ニ盡攝山ニ望ニ播山ニ貪ニ程夕過乱松間、一聲漁笛不知處、月白須磨灣又灣」とあり其他古歌舊詠多し壽永の役には源平二家の戰場と爲り遺跡の世に聞えたるもの少からず 安徳天皇も此地に遷幸あり一時 皇居と定め賜ひしこと物の史にも見えたり今も民家の表に古簾を掲げたる所多きは當時大宮人の住居となり其表に翠簾をかけわたしたる遺風なりとを既白宗匠の句に

朧夜やことさら須磨の古簾」とあり近年こそは其數も減しつれ維新の前までは家毎に此風あり須磨の古簾と呼做して世にも聞えたりしなり

九 壓道

東須磨村西國街道の入口にあり天上川の堤下を穿ちて車道を通せ

十 しものなり士人は之を穴門と稱せり

名倉塚

同村墜道の北にあり

壽永の役に討死せし貴人の塚なりといへど

も何人の事なるやは詳ならず一説には當村の鬼門を鎮護する神祠の跡

なりとも云へり

淨徳寺

同村名倉塚の西南にあり

月見山と號す古義眞言宗本尊千手觀音

にして久安三年仁海上人の創設せし所なり又寺中にある元圓福寺の本尊

藥師如來は行平中納言卿の歸京を祈りたる時靈夢によりて感得せし尊像

にして世に因幡藥師と稱するもの是なり

妙興寺

同村淨徳寺の西にあり山號淨徳寺に同じく月見山と號す日蓮宗

八品派にして本尊はあらゆる同派の寺院に同じ草創の時代は古記焼失せ

し爲め詳ならざれども村中一二の巨刹なりしことは口碑に残れり

月見山

同村妙興寺の西北に當れる山手にあり中納言行平卿の賞月亭を

作りし古蹟なりと云傳へり山中に月見の松あり古書に行平卿月見松は東

須磨の北尾崎にあり行平卿月見亭の舊蹟なり云々とあるは是なるべし凡

そ七八十年前まで卿の墓と稱する石碑ありしも風雨の爲め谷底に埋り

て今はなし又乾の方に因幡山あり古書に因幡山の遠山松とあるは是なる

歎卿の

立別れ因幡の山の峰にねふる云々の歌により名づけしならんと古書

に記せり契仲法師の百人一首改觀抄にも因幡國の山なるべしとあり恐く

は此處の歌にはあらざるべし

俳人西月故居

同村月見山の東に當る西國街道の南にあり森本何某氏の

家なり邸内に毘沙門天を祭る故に俗に毘沙門とも呼へり西月翁は尾張國

の生にして俳句を以て世に知られし人なり其墓は村中平松原にあり

從二位平光盛卿塔

同村西月故居の南田の中にあり卿は平賴盛卿の嫡

男にして壽永の役に戦死せしとぞ

一十 衣掛松

同村光盛卿塔の南の方海邊にあり中納言行平卿歸洛の時衣を松

が枝に掛けて風景を眺望せしとぞ村民伐取りて薪と爲し今は株のみを殘せり心々の業とや云はん

磯馴松

同村衣掛松の東にあり中納言行平卿歸洛の時此松名殘を惜みて其杖悉く都の方に打なびさしより此名ありとかや但し別様の松あるにはあらずすべて海邊の松をいふなり

中納言行平卿謫居舊蹟

西須磨村菖蒲小路

にあり行平中納言卿の此地に

さすらひし時住家ありし所なりといふ卿は平城天皇の皇子一品阿保親

王の一男なり天長三年在原の姓を賜ひ承和七年より次第に昇進し元慶六

年正月中納言に任せらる故に行平中納言と稱するなり其後民部卿按察使

の諸職を経寛平五年七月二十四日を以て薨す年七十六なりとぞ卿左遷の

事は史に見るざれども古今集に

田むらの御時に事にあたりて津の國須磨と云所にこもり侍りけるに宮

のうちに侍ける人に遣はしける

在原行平朝臣

わくらははに問人あらば須磨の浦に藻汐垂つと詫ふと對へよ

とあり謫居の事疑なかるべし高倉院嚴島行幸の記に

何がしの昔汐たれけんも思出らる云々」とあるは此ことなるべし

松風村雨堂

同所にあり堂の内には觀世音菩薩を安置すれども二女の靈

を祭る所なりと云傳へり其後に二女の石塔あり二女は田井畑の村長畑殿

何がしの娘にて藻汐、小ふじといひしを卿に召されて給仕せしより松風

村雨と呼びかへしとも又讚岐國鹽飽大領と云者の娘にて繼母の讒言によ

りて此所に來りしともいへり西行法師撰集抄には卿の浦つたひしてあり

さける時或海士に何處にやと問賜へば

白波の寄るなきさに世を過すあまの身なれば宿も定めず」とよみて隠

れしことを記せり此歌古今集に見るたり是より思付たる作物語ならんと

云説あり近世の人の歌に

須磨の浦や雨と風との濡衣はいかなる人かうつけたりけん」とあるも

虚言なりといへる心なるべし

前田氏居宅

同村二女堂の北にあり當村無双の舊家にして

神功皇后の

御時より家名連綿として今に續けり昔は近傍三莊を領し後世當地の里長たり維新前までは西國諸藩主の宿泊する所となり舊家の名諸國に聞えて隠れなく近年まで舊屋ありしも今は已に取毀てり庭前に菅公手栽の松あり庭後には長田神祠辨天祠等あり長田神祠は同氏の祖先 皇后の詔を奉じて出雲國より勸請し長田村の宮居成に及びて遷坐ありし跡也とぞ又庭中に清泉あり菅公の當浦に泊り賜ひし時此水を汲みて献りしに御感ありて自畫の像影を與へられ困りて菅井と稱すと云右の畫影其外種々の寶物を藏せり

諏訪神社

同村前田氏の南海邊にあり創立年代は詳ならざれども當地に有名なる神祠にして祭神は武甕槌命なり一説に此地を須磨と稱するは諏訪の變せしものにして諏訪は此神祠ある故なほせし名なりともいへり

綱敷天満宮

同村謝訪神祠の馬場先にあり菅原道真公を祭れり所傳に云

ふ菅公筑紫下向の時浦人船の綱を疊みて圓坐を作り公を其上に請しける所にして其後宮居を其跡に作り公の綱を敷きて安坐し賜ふ木像を崇めて神体とは爲せし也と

鹽濱跡

同村綱敷天満宮の下手にあり今はたゞ其名を土地の字に残すの

み興廢沿革は詳ならざれども上古は盛なる鹽濱なりしものゝ如し松風村雨の潮を汲みしは此處なりとぞ

頼政薬師

同村鹽濱跡の西北にあり元常福寺の本尊なりしも同寺は退轉

して堂宇のみを残せり源三位頼政卿の重興せし寺なるにより此名あり一説には菅浦前の念持佛なるが故なりともいへり

重衡松

同村頼政薬師の西須磨寺外門の内にあり今は幹のみを残せり三

位中將重衡卿の明石にて虜と爲り東上の途次此松の下にて休まれしにより重衡松とは云なり其時村人名物の濁酒を捧げれば卿取あへず

須磨寺 ささほろや波こゝねに打過きて須磨て飲こそ濁酒なれ

同所以北すへて其境内なり本名福祥寺上野山と號す本尊は觀世音菩薩古義眞言宗高野山蓮華三昧院の末寺たり當寺は元兵庫懷下山にありしを仁和二年開鏡上人勅を奉して此處に移し自ら其開基となれり中古廢絶せしを源三位頼政卿再興し慶長年間震災に罹りし時豊臣秀頼公重修せられしと云ふ昔は僧坊十二舎ありしも今は纔に二舎を殘せり仁王門の金剛力士は運慶湛慶の作中門の額は一谷源平躑躅の大木義經公の馬鹽、敦盛堂の同卿の木像は熊谷蓮生坊の作なり佛堂の内護摩堂の一字は六百年以前の建物なりしに此程火災に罹りて烏有に歸したり其外境内に行者堂、十王堂、大師堂及稚木櫻、相牛松、義經公腰掛松 神功皇后鈎竿竹等あり什物の内法然上人筆敦盛卿赤旗名號、蓮生坊筆同卿保呂衣名號、同卿幼時手跡、同畫像、同鏡、青葉苗等最も世に知られ又武藏坊の制札は稚木櫻と共に名を傳へたり其文に曰く

須磨寺櫻

此花江南所無也、一枝於折盜之輩者、任天永紅葉之例、伐一校一者可剪一指、

壽永三年二月 日

稚木櫻は未だ其由來を知らず此制札には須磨寺櫻とあり源氏物語須磨の卷に

うへしわか木の櫻はのかに咲そめて云々」とあるによりて植おさしなるべしと古書にあれどもこは源氏の君の居ましし所の事なるべく此處は其故蹟なりともおもはへず

無官大夫平敦盛卿頸塚 同寺境内にあり首實驗を畢りし後此處に葬りしと云傳へり卿の首は父經盛卿の許に送りしと源平盛衰記に見るたり古書にも享和以前のものには頸塚の事を記せしものなし

現光寺 同村須磨寺の南にあり一に源光寺に作る眞宗本願寺派本尊は阿

彌陀佛なり創立は永正十一年なりと云傳ふれども中頃火災あり古記燒失
したれば所傳詳ならず光源氏の故蹟と題せし石標あれどもまこと然る君
のましませしや否を知らず或は西宮左大臣謫居の地なりとも云へり左大
臣は安和二年大宰權帥に左遷せられし人にて式部の刀自の源氏物語は光
源氏を左大臣に紫の上を己れに擬らへ中秋の月より感情を惹起して先須
磨の巻を作せしと聞えれば或は此れといの跡を寄せし所なるを打つけ
に源氏の君と云ならはせしやも知るべからず

風月庵似雲故跡 同寺の境内是なり本堂の前に似雲の碑あり表に風月庵
と刻し裏に

何處とも誰か云けん須磨浦やかゝる所の秋の夕くれ」とありこは似雲
の和歌なりとぞ源氏に

又なくあはれなる物はかゝる所の秋なりけり」とあるに基きてよみ出
たるものならん似雲は安藝の人歌を好み諸國をめぐりて己れの宿をさへ

定めざれば時の人今西行と呼びしとぞ似雲聞きて

西行に姿ばかりは似たれども心は雪と墨染の袖」と戯れしとかや

芭蕉句塚 同寺門外にあり豊後人何がし宗匠の建る所なり其碑に

見わたせばながむれば見れば須磨の秋 は せ を

關屋跡 同村現光寺の西にあり延喜式内に見えたる古關にしに 皇國四

關の一として其名高し行平朝臣の

旅人の袂涼しくなりにけり關吹越ゆる須磨の浦風」とよまれしは是な
り今は一柱の石標のみを殘せり其傍に關守橋あり川を關守川といふ又路
守川、遺瀨川、千鳥川等の名あり名所圖會は兼昌ぬしの

淡路島通ふ千鳥の鳴聲に幾夜寝さめの須磨の關守」とよみしに依れば
千鳥川なるべしと記すれども此歌川に因みたるものにも限らざるに似た

九
村上天皇靈蹟 同村關屋跡の西にあり今は神祠と崇めまつれり所傳に云

ふ昔太政大臣師長公慈誓の妙手を得まく入唐の思立あり此地に來られしに村上天皇梨壺皇女の神靈あらはれ之を止めて妙手を授け賜ひければ公も入唐を思ひ止りしとぞ祠前に片枝の松あり公の歸京を惜みて其枝悉く東にむかへり祠後には公の塚あり一説に龍宮より公は捧げたる獅子丸の名弦を埋めし所といへりこは謠曲上弦の事實に基きたる説なるべし

巳日稻荷祠 同村 村上天皇靈蹟の北にあり光源氏の巳日の祓を行はれし所といふ又關所の跡は今の印ある所にあらずして此處なり故に關守稻荷の名ありともいへり

須摩停車場 同村巳日稻荷祠の西南にあり山陽鐵道東より第二の驛にして明治二十一年十二月二十五日を以て開設せしものなり

須摩上野 同村停車場の上方にあり東は須摩寺の近傍より西は一谷近傍に至る西國街道の上手にある小高き所といふ其背後にあるを後山と呼べり

一谷、二谷、三谷 同村上野の西に續きたる谷を一の谷といひ其次を二

の谷又其次を三の谷といふ一の谷の奥行五町横幅三十間兩岸高十二間あり二の谷三の谷粗同じ

内裏遺蹟 同村一谷にあり壽永の役假に皇居と定められし所なり今紫宸殿の跡と稱する所に古松數幹あり其下に安徳天皇を祭れり近傍五百坪許は往古より免租地なりしも維新後は其旋を廢せられぬ

鐵拐山 同所の北に當れる峻嶺なり鐵拐の名漢土の鐵拐仙人の故事に基く歎壽永の役源義經公此處を下して一谷を攻め破りしと云ふ山陽翁の詩に

九郎一身渾是膽伏旗仆鼓出不意とある是なり今も坂落し巖石落し等の名あり嶺高く岸急にして人馬の足をどくむべき所にあらず平氏險を待みて備疎かなりしより忽ち公の乗する所となりさしも堅めたる大手

搦手は得も守らず陣所々々も瞬く間に攻落され二十餘年榮花の夢も爰に

至りて名残をといめず然れば星巖翁も

二十餘春夢一空、豪華吹散海嘯風、山排「殺氣」參差出、潮送「冤聲」日夜東、憶昔滿宮悲去鷓、欲下將「往事」問中飛鴻、上欄斑剩見英雄血、塹樹鶉啼朶々紅」と吟せり

勢揃松

同山の北にあり一谷攻の時義經公の軍勢を揃へたる所なりと云傳へり

鐘掛松

同山の左手にあり同時に鐘を此松に掛けて合圖を爲せし所なりとぞ今須磨寺にある山田莊安養寺の梵鐘是なるべし

鉢伏山

同村一谷の西にある圓山を云ふ 神功皇后征韓凱旋の時此山に上られ山の形兜に似たりと詔ありしより山の名となりしとも又御兜の蓋を山上に埋め賜ひしに因るともいへり

戦濱

同村一谷より西の海岸をいふ源平二氏の最も激戦せし所なるゆへ此名あり

保養院

同村二谷と三谷との間にあり明治十八年を以て開きし所にして

構内には旅舎、温泉場、遊技場等あり古松内外に立ならみて眺望もまた佳なり推して當地唯一の勝地と爲し來遊ぶ者四時絶ゆることなし

公子塚遺跡

同村保養院の構内に當れり公子とは無官大夫敦盛りをいふ

嚙最後の折其胸を葬りし所なり俗に庚申塚と呼べり塚上六字名號の石碑ありしも保養院を建築せし時塚を取崩し碑は頼政薬師の傍に持行けり碑

銘の筆者は法然上人なりと云傳へり

療病院

同村三谷にあり鶴崎何某氏の私立病院にして明治二十二年の建

築に係れり其他は保養院の西に隣り地形彼より高く眺望もまた一等を駕せり

平家一門塔

同所の西にあり世に敦盛塚といふは非なり五輪の石塔にし

て高一丈餘葺石四尺四方あり北條西園寺入道平貞時公の建る所也と云昔は往來の人小石を其側に累ねて石塔に擬らへ其菩提を吊ひけるよし古書

に見えたり今は然ることなきも香花を供ふる者四時絶ゆる時なし其人多くは平家の爲めと云はず敦盛の卿を祀ふなりといへり古書に敦盛塚と記するものあるも世俗の言に従ふなるべし

境川

同村の西端にあり攝播兩國の分るる所故に境川といふなり川中に榜示の木ありそれより東を攝津西を播磨と定めたり芭蕉翁の句に

かたつむり角ふり分けよ須磨明石」とあるは此邊の吟なるべし

鹽屋停車場

鹽屋村にあり山陽鐵道の停車場にして明治二十九年を以て増設せし所なり同鐵道東より三番目に當れり

東垂水

鹽屋村についたる一村をいふ昔は西垂水をつらぬて一様に垂水といへること水の浦垂るる所を垂水といへること諸國に其類多し街道の北手は一帶の斷崖にしてさなから屏風を引めぐらしたる如く處々に飛泉あり白瀧、駒拾瀧オンチか瀧などの名あり國道は海岸を通して眺望頗るよし茶屋、料理屋等斷續相望み旅人足をとひむるに便なり

海神社

西垂水村にあり延喜式内の大社にして今は國幣中社たり祭神は

底津綿津見命、中津綿津見命、上津綿津見命の三神なり古書には垂水

神社又日向神社と稱すと記し神名帳には海神々社とあるよし是も古書に

見えたり俊頼朝臣の

そりのほる人の爲めとや爰にしも跡を垂水の朱の玉垣」とよまれしは

是なり

舞子停車場

同村にあり山陽鐵道第四驛の停車場なり初は地名によりて垂水停車場と稱せしも近年舞子と改稱せりこは西の方に舞子濱あるか故なりとぞすべて停車場には其名と土地の名と符合せざるもの多し

遊女塚

同村にあり塚上に石塔を建て其表に梵字數個を彫付たる外文字の痕なし俗傳に建武の頃筑前博多の商人何がしといふ者江口の遊君何がしの爲めに建る所とも又大阪の遊女下の關に行く道すがら此海にて溺死せし故築くとも云へり然れども書類の憑據すべきものあるにはあらざる

也近世宮崎三味翁此塚に據り一卷の物語を著し遊女塚と題して世に公にせり

千壺

同村の北にあり古書に周圍四尺五寸許の陶壺數百土中に埋る其形車輪の如しと見えたれども今は然ほど多からず稀に土中より掘出すことありこは荒陵なりとも又忍能王 神功皇后に背き偽り造りたる陵なりとも 仲哀天皇此地に行幸ありしとき壺に花卉を植へて觀覽に供へし跡なりともいひ諸説區々にして信を措き難し

多聞寺

多聞村にあり吉祥山と號す貞觀年中慈覺大師の草創せし所にし

舞子濱

山田村の内西國街道に沿ひたる海濱をいふ此地は南に一帶の沙灘打ついき北には一面の松林あり古松數千株立並びて高低なく老幹屈枝其狀の古怪なること多く見ざる所なり加も葉茂り色ふかくして海邊の白沙に映し海を隔てて遙に淡路の島山を望む等其風致いはん方なし松林

の間に左の碑を建たり

熱凝乃穴美麗母靈幸神代隨能淡路島根魯

堀真名井

源貞世主の道行ぶりに

白濱の色もけちらめ見えたる心地して雪を敷たるやうなるうへに緑の松のとしわかかくて濱風になびきなれたる枝に手向草打しけりてむらくとなみたり」とあるは此處をいひしものなりとぞ梁川星巖翁播州道中の詩に

粉蝶依微赤石城、香衫爭出踏春晴、最好舞兒磯上望、淡山如髻鏡中明」とあり又誰やらんの詩には

煙霞春色浴、晴蕩惱吟情、明媚停人處、不差舞妓名、といへり此地の風景に富めること須磨明石といへども遠く及ばず或は推して攝播二州無双の勝境と爲すものあるも過賞にはあらざるべし國道に沿ひて旅舎、割烹店數軒あり孰も眺望に富み樓謝また壯麗なり頼翁の詩に

舞妓灣頭酒如「泉」とあり昔より繁昌せしこと推て知るべし

明石

一に赤石と書せり古名なるべし明石と改めしは何の年代なるやを詳にせざれども享和年間の版本にも此名あり凡そ百年以來は明石と稱せしこと疑なし明石海、明石瀉、明石港、明石迫門、明石泊、石石里、明石驛などいへるも凡そ一つ所なり此地は播州東部の一都會にして町内の大字を十四個町四個村に區別せり元松平家八万石の城下たり海邊には明石港あり陸路は西國街道に當り又鐵道の便利を添へたる等船舶の出入旅客の往來晝夜間斷なく鐵道以南は最も繁華を極め海岸は殊に眺望に富めり源氏物語明石巻に

濱のさまけにこころことなり人稠う見ゆるのみなん御ねかひに背さける」とあり其頃よりも人煙のしけき所なりしこと疑ひなし歌聖人丸朝臣の

はのくくと」の口吟は人口に膾炙して偏ねく世の知る所なり續後撰集

順徳院の御製に

明石瀉海士の管屋の煙にもしはしは曇る秋の夜の月」とあり門部王の見わたせば赤石の浦にたける火の穂にぞ出ぬ妹か戀ふらし」の一首は万葉集に見えたり其他證歌猶多けれども然まではとて略しぬ近傍見るべきもの多し今其著しき所を左に書付く

明石停車場は山陽鐵道第五の驛にして市街の北部にあり同鐵道開通の時取設けたるものなり

明石城墟は停車場の西北にあり元和年間右近太輔小笠原主の築く所にし

て明石藩松平主の居城たり今は公園となれども隅櫓は猶殘れり

谷妙見堂は城墟の東にあり躰躰杜鵬花の名所なり

本照寺は砂見堂に隣れり

人麿神祠は本照寺の東人丸山にあり歌聖柿本人麿朝臣を祭れりはのく

との歌を殘されし故此祠を建たりとそ此處眺望甚だ佳なり境内に碑あり

り元の藩主の建る所銘は林道春なり又雲井櫻杖櫻其外くさぐさあり
月照寺は人麿神祠に隣れり庭前に赤穂の義士間瀬久太夫手栽の梅あり八
房と稱す

腕塚は腕塚町にあり平薩州忠度卿の腕を葬りたる所といへり

志度卿墓は忠茂町にあり墓前に源忠國主の碑を建て其面に「今はたゞの

りのしるしに残る名の苔にささめる名こそ朽せぬ」と刻せり又明石藩
の儒者梁田蛻巖翁の碑あり

大藏谷は東の入口にあり昔より驛路にして旅舎多く車馬のたて場なり

休石天神は大藏谷にあり菅公を祭れり公筑紫下向の時石上に坐し賜ひて

當地の驛長を召し「驛長無、驚時變改、一榮一落是春秋、」の詩を題し賜
ひし所なり神祠は驛長の建る所にして境内に野々口隆政翁の碑小野湖

山翁の標石あり

稻爪神社は休石天神の東にあり 推古天皇の御宇伊豫國より三島神祠を

遷せし所なり同國武士越智益躬主の南蠻の賊魁を誅せしも此所とそ稻

妻或は稻積とも書す並に其義未だ詳ならず

はのくの濱は同所近邊をいふ歌聖の歌によりて名と爲す歌

朝顔寺は鍛冶屋町にあり本名光明寺真宗本願寺派の寺なり光源氏の古蹟

なりと云傳へり

波止場崎は港邊にあり港内は勿論遠く淡路の島山をのぞみ燈臺の邊風景

甚だよろし

月山は波止場崎の西にある丘をいふ光源氏の月を賞せし所なるより山に

名く此處の風景は波止場崎にも勝れり

岩屋神社は月山の下にあり延喜式内の神祠にして伊弉諾尊伊弉册尊大日

靈尊、蛭子命、月讀命素盞鳥尊を祭れり當町第一の大社なり

長林寺は岩屋神社の西にあり龍王山と號す元正天皇の勅願所にして本尊

は薬師如来なり

伊弉諾神社は長林寺の西にあり

男狹磯塚は伊弉諾神社の近傍にあり男狹磯とは海士の名なり 允恭天皇の御宇海底に入りて大なる眞珠を取揚げて失せたりけるとを 天皇悼みて葬らしめ賜ひしなりとぞ

善樂寺は同神社の北にあり本尊は地藏尊にして保元元年平清盛公當國の守たりし時再建せしといふ養和二年寺僧 公の爲めに五輪の塔を建たり又明石入道の碑あり入道の事源氏物語に見ゆ

無量光寺は善樂寺の南にあり光源氏の月を賞せし所なるより月見寺ともいへり本尊は阿彌陀佛にして西京智恩院の末寺なり 播州の名所は尙多けれども爰に略す但し著しく世に聞るるものは左の如し

●太山寺

●大郷梅林

●金崎梅林

明石郡

●神出山

加古郡

●二見浦

●手枕松

●刀田山鶴林寺

●具平親王御廟

●和泉式部刀自墓

●稻田太郎姫命御廟

●尾上松

●高砂松

印南

郡

●印南野

●八十石櫓

●石寶殿

●曾根松

●遍照山時光寺

●兒島範長主墓

飾磨

郡

●仁壽山

●牛堂山國分寺

●三左右衛門堀

●白鷺城

●姫路

●船場本徳寺

●播磨富士

●白國梅林

●塔位山隨願寺

●廣峰神社

●書寫山圓教寺

揖保郡

斑鳩寺

天徳山龍門寺

鷓籠山

野見宿彌葛

室の津

赤穂郡

赤穂城趾

大石氏舊墟

摺濱

赤穂城趾

大石氏舊墟

華岳寺

赤穂城趾

兒島高德主墓

舟坂山

白旗故城

兒島高德主墓

神戸より東の部

初利天上寺

武庫郡摩耶山にあり佛母摩耶山と號す古義真言宗なり當寺

は天武天皇の御宇天竺法道仙人の草創せし所にして本尊十一面觀世音

は釋尊四十二の時鬘浮檀金を以て鑄させ賜ひし尊像なり法道仙人我朝に

持來り大悲有縁の靈地なりとし此處に止り自ら觀世音の木像を刻し右の

尊像を其胸中に藏めしとぞ今本堂に安置するもの是なるべし傍に夫人堂あり佛母摩耶夫人の像を安置すこは梁武帝一鑑三禮の尊像二體の一なりしを弘法大師入唐の時之を得て當寺に納めしといへり昔は伽藍壯宏を極め子院僧坊三百宇に近く攝州第一の巨刹と稱せしよし古書に見えられども寛永年間には大に其數を減じ僧舍わづかに八字を残し今はいよく減して三字と成れり山下上野村に閻魔堂ありそれより急阪を曲ること數回寺門に至る門内より寺庭まで七段二百餘階の石磴を作れり此地は正に山の顛にあり山勢高峻にして雲に雜り天を摩し江山の眺望頗る佳なり近年一條の新道を開き布良より熊内を経て仁王門の内に屬せしめ參詣する者皆此便に依ると云ふ

赤松圓心主戰場

同郡摩耶山をいふ今も本堂より四五町許下の方に陣所の跡と稱する所を残せり圓心入道 後醍醐天皇の勅を奉じ播磨、備前、美作の兵を率ゐ此山中に楯籠りて天下の大兵を引受け屢々勝利を得しこ

六十三 太平記に見るたり
敏馬浦 同郡岩屋村にあり神戸市脇濱村に連りて境界の目標となるべきものなし万葉集に

玉藻かる三ぬめを過ぎて夏草の野島か崎に船近づきぬ」とあるは此

處なるべし野島か崎は淡路の野島ならん地理よく適へり
敏馬神社 同浦にあり延喜式内の神祠にして汶賣神社と見えたり元は能

勢郡敏馬山にありしを 神功皇后此處に遷し賜へり浦の名の因て起る所なるべし

求女塚 同郡味泥村にあり元の菟原郡三塚の一にして此塚は菟原男なり

といふ所傳は處女塚の條にくわし菟原男は一に菟原の小さく田男とも稱せり

處女塚 同郡東明村にあり塚上古碑あり其表に

いにしへのさく田男の妻とひしうなひ處女のたきつきは是」と刻せ

り筆者は賀茂季鷹翁なり此歌万葉に見ゆ前の求女塚下の住吉村の同塚と此塚とを合せて菟原郡の三塚といふ古書に周圍各八十餘歩と記せり万葉集に

古のますらをのこのあひ競ひ妻とひしけん葦の屋のうなひ處女の奥城を云々」とあり短歌はやがて前に記するものなり其所傳にいはいく昔此

土地に處女あり之を戀ふる男二人あり一人を菟原の小竹田男一人を和泉國の茅停の大夫といふ此男とも年の頃顔かたら心さま渾て同じ様なりければ女思ひまどふを女の親二人の男に生田川の水鳥を射當たらん方に上

らんどいふに一人は頭に一人は尾の方に射當て是また勝り劣る所なし女

いよくわづらひで遂に身を生田川に沈め二人の男も同所に沈みて一同

に失せけるを其親ども之を三所に分ちて葬りしと也此事大和物語に見るたり後人の作り設けしものなるべしとも又上古の荒陵なるべしともいへり

小山田高家主碑

處女塚にあり建武の役に高家主の新田義貞卿に代り此

處にて戰死せしこと太平記其他の諸書に見えたり碑は近年建る所なり
御影 同郡内にある町の名なり昔は海邊を灘浦と稱し住吉より生田川迄

を大灘同所より西宮までを中灘といひしこと古所に見えたり今も俗に灘
と呼べるは大抵此邊を指すなり町内酒匠多く灘酒の名世上に聞えたり
て大に好評を得たり當町より西宮町近傍に於て年々醸造する石高は凡そ

三十万石を下らず縣下の酒税は常に地租の上により現に二十六年期の統
計に據るに地祖の高百六十八万圓酒税の高百八十三万圓にして酒税の地
租より多きこと十五万圓なりといふ其多きこと推て知るべし

住吉停車場

同郡住吉村にあり官設鐵道の停車場にして同鐵道と共に成
就せしものなり

住吉神社

同村にあり元菟原郡と稱せしにより菟原住吉と呼べり祭神は
表筒男、中筒男、底筒男の三柱にして外に 天照太神 八幡宮 神功皇

後の三坐及攝社二坐あり當社は

神功皇后の豊浦宮より海邊二十二個所

に勧請し賜ひたる其一社なり

求女塚

同村にあり茅停の大夫の塚といふ茅停の大夫とは茅停男なり所

傳は已に前に記せり

雀松原

同村にあり北の方山腹より南の方海邊に至るまで長十數町に

連れり國道の少し北に左の碑あり

竹ならぬかげも雀の宿といはいつ名にしめし松原の跡

住吉川

同村の東より海に瀆けり水源は武庫山に發し同郡野寄村を経て

此處に至るなり平時は水なし故に天上川の名あり

岡本梅林

同郡岡本村にあり樹老ひ地古りて趣多く眺望もまた甚だ佳な

り毎年花咲き霞棚引頃に至れば雅俗群集して春を賞する者引も切らず又
日清戦争の爲め討死せし人の招魂碑を建設する者あり日本軍人の芳名は
梅花に入りてかをりいよく高し

十四 山路古城

同郡田中村にあり觀應年中赤松範顯主の居城たり今は目標の

憑據すべしものなし

葦屋浦

同郡葦屋村を云ふ昔は葦屋川以西敏馬浦までを葦屋浦と呼しといふ万葉集處女塚の歌の詞書に葦の屋の處女の墓を過る時云々であるにても知るべし一説に生田川までを云ふともいへり夫木集九條内大臣の歌に

葦屋のいさなこ山の水上をとりて見れば布曳の瀧」とあり

在原業平卿別荘古蹟

同村にあり今は田圃の宇に残れり抑々葦屋は業平卿の兄行平中納言卿の采地なりしこと古書に見ゆ故に卿の別荘ありしならん歎卿の歌に

晴る夜の星か川邊の螢かも我住むかたの海士の焼く火か」とあるは此處にての詠なりとそ但葦屋川は螢の名所なり

猿丸大夫古墳

同村にあり世に猿丸墓といふ墓標に六字の名號を刻し左

に猿丸右に大夫と刻せり

磯塚

同村にあり近衛院の御時源三位頼政卿の射落したる怪鳥を埋めし所とそこは船に入れて西國に流せしに此處に漂着せしを浦人之を取りて埋めたりといふ或書に今は定かならずとあれども現に猿丸墓の南往還の傍にある祠様のものはなりと土人はいへり

阿保親王御廟

同郡打田村にあり親王は平城天皇第二皇子行平業平兩朝臣の父君なり三品兵部卿彈正尹上野下總の太守たり薨せし後一品を贈らる近傍に阿保親王寺ありて御廟を守れり或は云仁和三年行平卿須磨に配せられし時此とるに遷り賜ひしと

金津山

同村にある小丘をいふ所傳に阿保親王の殿舎ありし所にして金一千枚金瓦一万枚を此處に埋め置き里人に賜ひて飢饉の時廻取るべきよしを諭されしと童謡に

朝日さす入日かくやく此下に黄金千枚瓦万枚」とあるは是なりとかや

打出濱

同村の海岸をいふ昔藤原忍熊二王子軍勢を此處に出して 神功

西宮神社

皇太后を待しより此名ありとそ王子の軍勢の打出たるを云ふなり

伊弉諾伊弉册の尊の御子にして三歳にならせ賜まで御足立さりければ天盤櫛の

船に乗せて放ち棄られしに此處に寄られて跡を垂賜ふを蛭子宮と崇めし

とそ海を司る御神なり現時は境内廣く社殿壯嚴にして攝社及境内神社等

多し 其他著しき名所は播磨の例によりて左に列記すべし

武庫郡

越水故城

越水故戰場

六甲山

六甲山鷲林寺

甌岩

廣田神社

松原山昌林寺

寶塚温泉

武庫行宮

瓦林故城

松岡故城

押照宮

附 錄 終

兜山神呪寺

川邊

尻崎城跡

祝津宮故蹟

伊丹故城

崑崙山昆陽寺

紫雲山仲山寺

神秀山滿願寺

有馬

有馬温泉

鼓瀧

花山院法皇御陵

武内宿禰墳

郡 佐々成政主墓

御願塚

豊島河原故戰場

昆陽大池

中山温泉

多田神祠

郡

有馬山

有馬行宮跡

浦初島

猪名笹原

昆陽故驛

荒府池

西妙寺瀧

攝津源氏舊蹟

有馬富士

最明寺時頼故蹟

注目セヨ  特別販賣品目録  ナ

外國切手

第三號三拾種入袋 代價郵稅共 貳拾五錢
 第四號五拾種入袋 全 五拾五錢
 第六號百種入袋 全 壹圓五拾錢
 第九號貳百拾種入袋 全 五圓五拾錢

一本邦現今切手一圓以下拾三種入袋全 拾貳錢

一全現行外切手貳拾種入袋 全 壹圓貳拾錢

一西郷札五圓(但西南役賊軍發行)壹枚全 五拾錢

但此札ナ製造スル者ハ急度軍律ニ處ス等ノ文字アリ將軍當年ノ意氣鏡ノベシ

一維新前通用舊國札類貳拾種代價郵稅共 貳拾錢

一萬國切手貼付帖クロス洋裝美本 壹冊全 五拾錢

一米國出版萬國切手目錄書壹冊全 三拾五錢

洋裝紙數四百ページ切手圖面五千以上アリ

一帝國郵券錄 壹冊代價郵稅共 八錢

石版彩色摺切手圖面入本邦切手ニ關スル詳細ノ事項ヲ記ス

一御送金爲替ハ神戸局宛〇切手代用ハ一割増ノ事

一當店ノ販賣品ハ槓造又ハ偽造品ニ非ルヲ確證ス

神戸市元町通三丁目百三拾九番邸

榮屋商店

●發賣廣告

暗黒本願寺論

壹部定價拾二錢
郵稅不要

郵券代用二割増

光り輝く六條に威勢も猛き本山を捕へ來りて茲に暗黒本願寺と叫ぶ、狂人の聲ならずんば抑も痴者の言か編者自ら之を知らず、去つて本書に之を問へ、蓋し怪塵十丈の底に埋葬せらるゝの感あらんか、

○日本人の批評 暗黒本願寺論も是れ片々たる一小冊子のみ而も其言ふ所西本願寺の情弊を指摘して餘蘊なし所謂寸鐵人を殺すものか否か云々

●續暗黒西本願寺論近日發賣す(定價金同斷)

發賣所

神戸市多聞通二丁目
裁判所前

日東館書林

●讀書家は左の書林と記憶せられよ

開(明治廿四年)業

神戸市多聞通二丁目
裁判所前

日東館書林

書籍雜誌小説類取次大販賣業

開(明治廿九年)店

神戸市多聞通三丁目
楠公前

多聞堂書店

●御注文品の配達は迅速にして賣價非常に廉なり

廣告

本社ハ左ノ三要素ヲ基礎トシ精巧ナル器械ヲ具備シ老鍊ナル技師ヲ聘用シ
下記科目ノ事業ヲ相營候間御用仰開被下度希上候也

優美堅牢 價格至廉 期限正確

大阪市西區阿波座壹番町六十番屋敷
阿波橋筋日向町北へ入

大阪製本印刷株式會社

營業科目

- 活版印刷及活字販賣
- 石版銅版及彫刻
- 和洋紙帳簿製造
- 和洋書籍製本
- 株券
- 小切手
- 送金手形
- レツテル
- 電氣版
- 寫真版其他

明治三十年四月十二日印刷
全 年四月十四日發行

神戸名勝案内記
定價金二十五錢

編者 高知縣士族 鍋島直身

神戸市北野町三丁目
二十三番屋敷ノ四寄留

發行者 廣島縣平民 石丸甚八

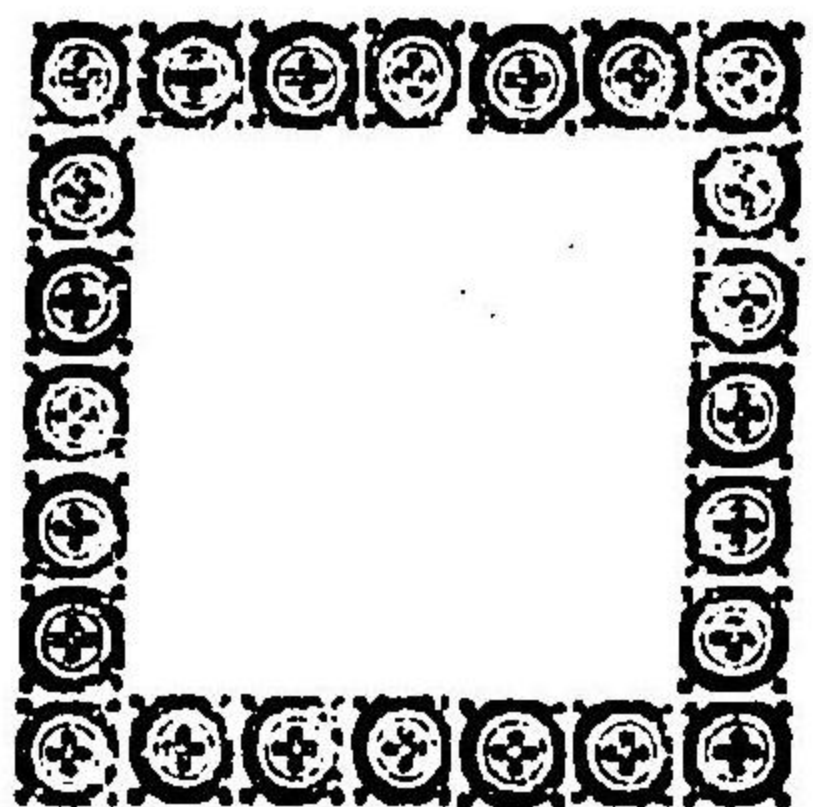
神戸市多聞通二丁目
二百四十二番屋敷寄留

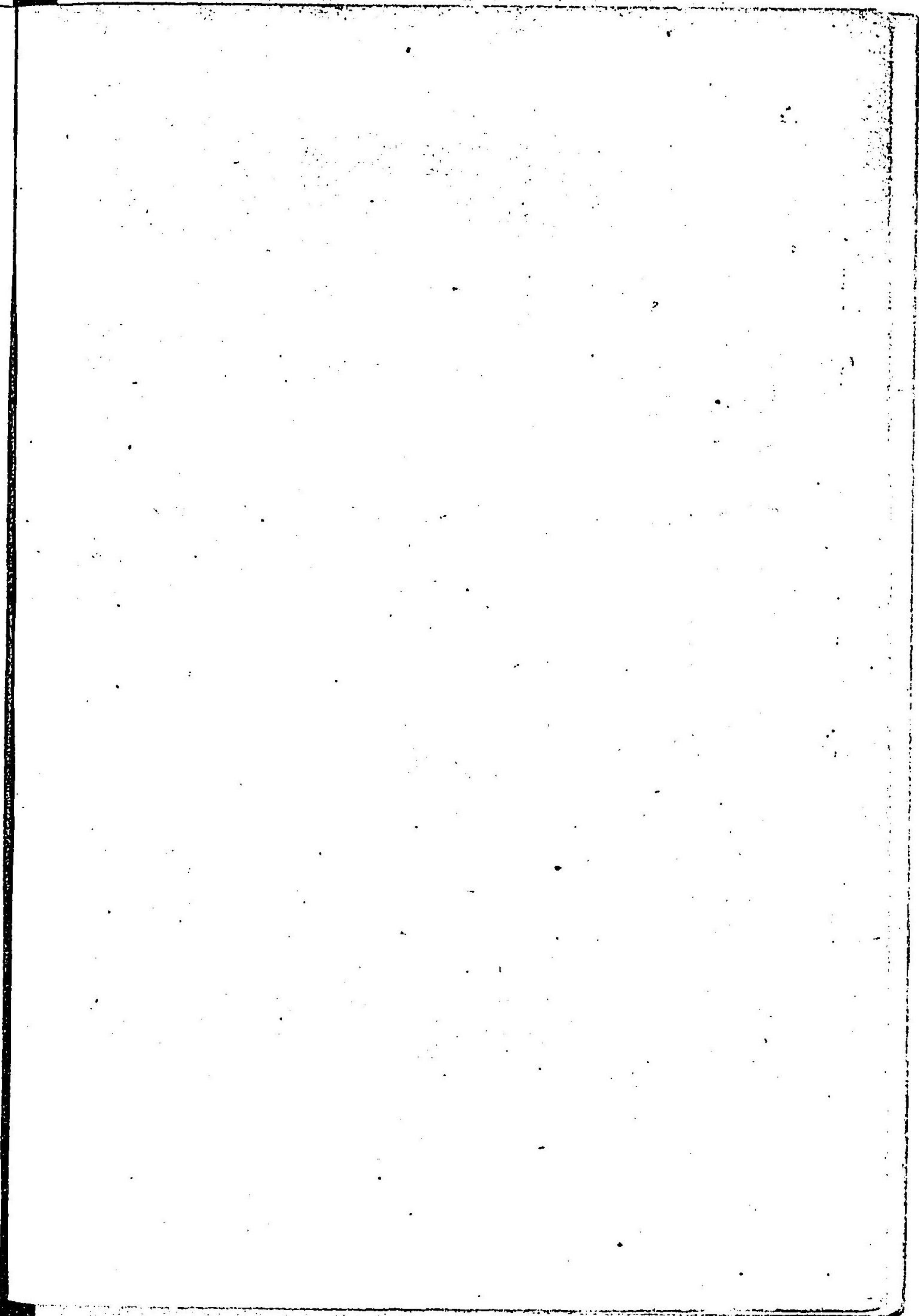
印刷者 矢野松之助

大阪市西區阿波座壹番町六十番屋敷

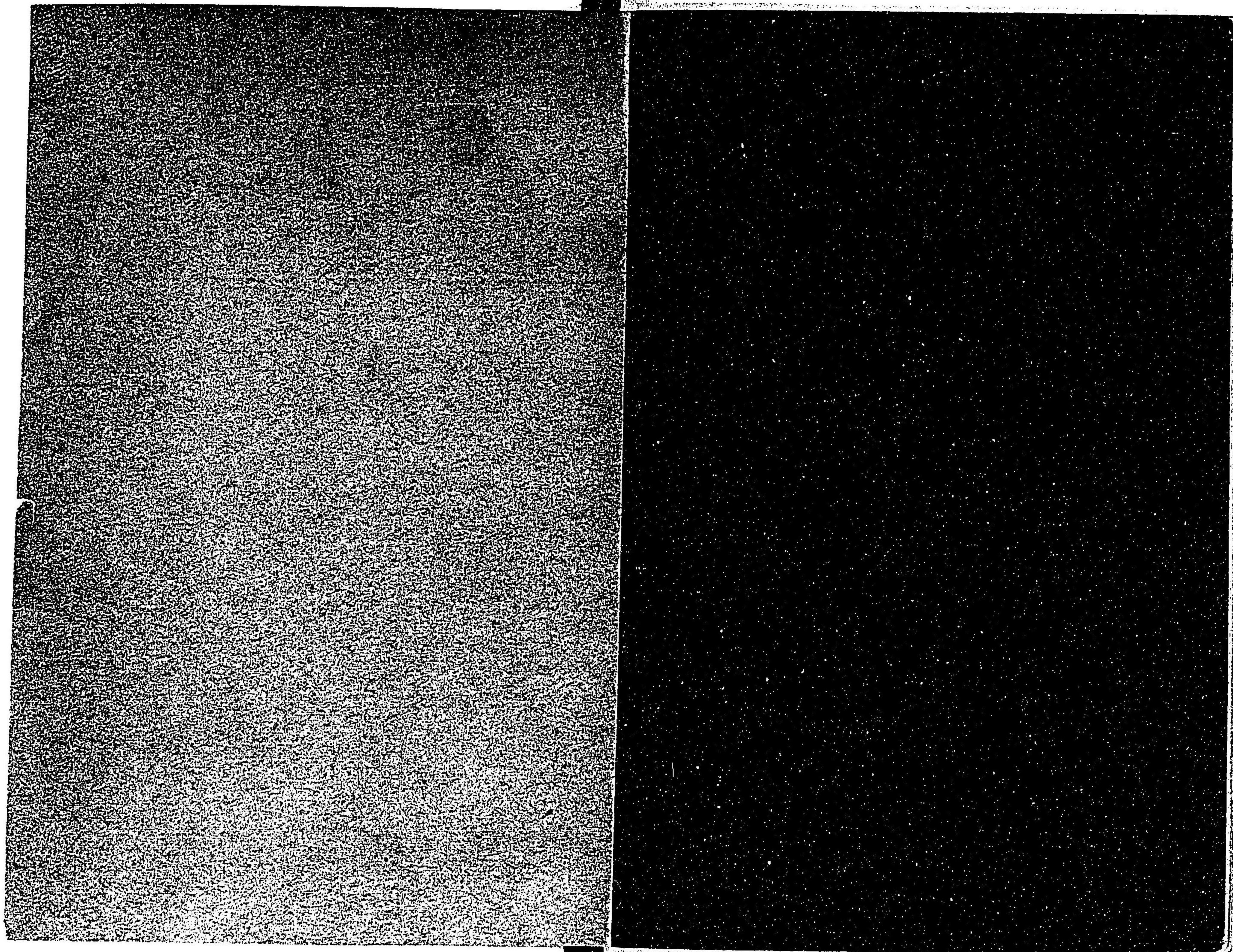
神戸市多聞通貳丁目

發賣書肆 日東館書林

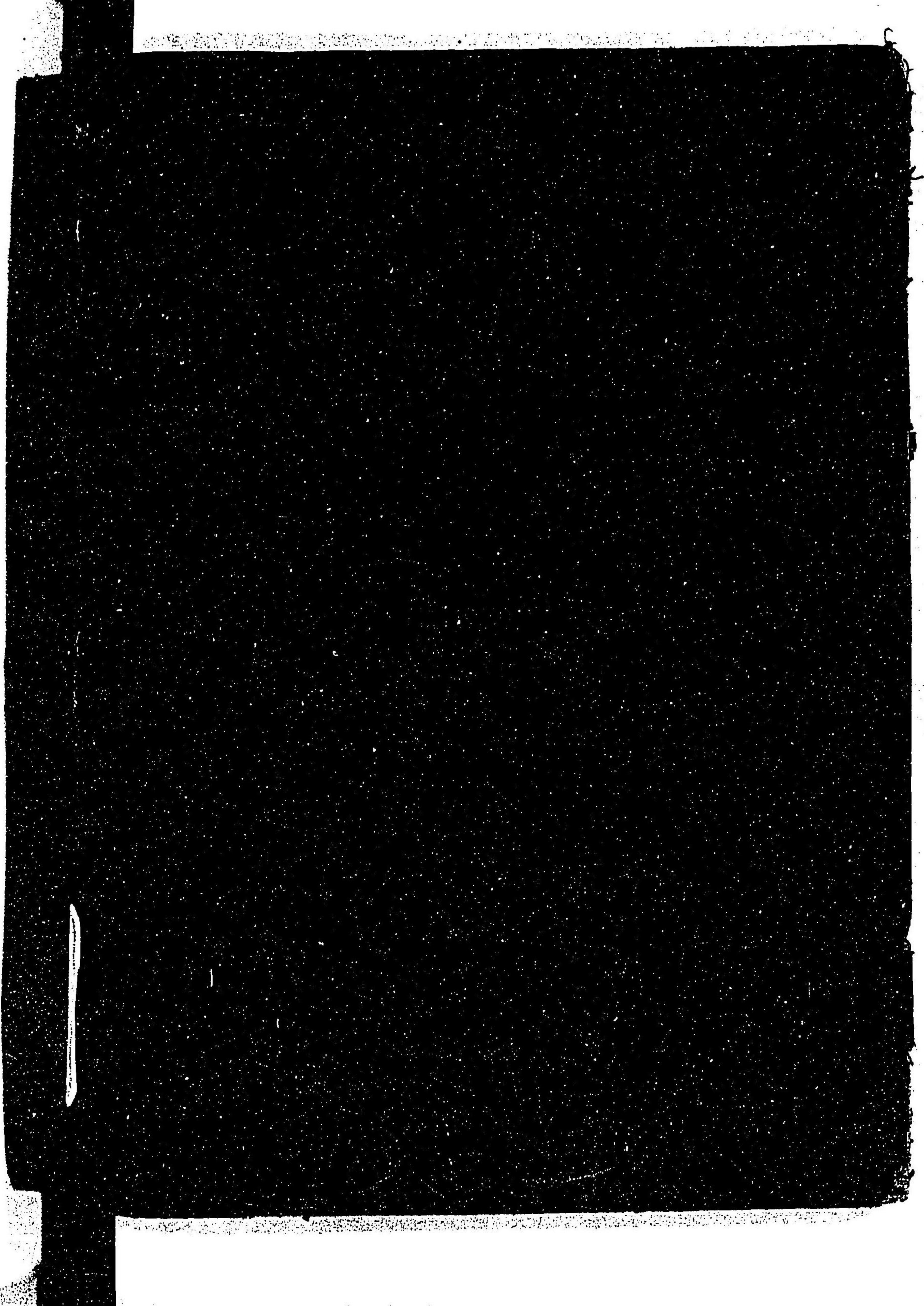




71
15



71
115



025428-000-1

71-115

神戸名勝案内記 附, 近傍

鍋島 直身/編

M30

ADC-2878



